

釜石市にみる「地方における希望」

橘 川 武 郎
(一橋大学大学院
商学研究科教授)



岩手県釜石市。日本の近代製鉄業発祥の地となり、鉄鋼業の発展とともに繁栄を続けたこの町も、1989（平成元）年に新日本製鐵釜石製鐵所の高炉が停止されてから、かつてのにぎわいを失うようになった。1963年には9万2千人を数えた人口も、2007年には4万3千人にまで減少した。

このような印象が強いため、部外者のなかには、釜石市に対して、地方経済の疲弊と企業城下町の衰退という「二重の悲劇」に見舞われたさびれた小都市であるという、先入観をもつ人がいる。しかし、実際に釜石市を訪れ、キーパーソンにインタビューを重ねると、そのような先入観が間違っていることに、すぐに気づかされる。釜石市の人々は、下を向いていない。活気ある町の再生をめざして、上を向き、前を向いている。

筆者は、東京大学社会科学研究所が現在取り組んでいる全所的研究「希望学」（研究代表者は玄田有史教授）の釜石プロジェクトのメンバーとして、昨年から今年にかけて、いく度か釜石市を訪ねた。希望学とは聞きなれない言葉であるが、「希望を社会科学する」を合言葉に、希望と社会との相互関係を考察しようとする、新しい学問のことである。経済学など従来の社会科学の多くの分野では、個人が希望を保有していることを前提に、その希望を実現すべく行動することを、社会行動分析の基本的な視座としてきた。しかし、現代社会、とくに最近の日本では、希望は与件であるという前提自体が崩れつつある。希望学は、この「社会科学の危機」とも言える現象に、正面からメスを入れようとしている。

希望学が釜石市に注目したのは、二重の悲劇との遭遇にもかかわらず、希望をもって町の再生をめざす動きが健在であることを知ったからである。希望学釜石プロジェクトでは、そのような動きを、経済学・経営学・法学・政治学・社会学などの観点から、多面的に分析している。筆者は、その一員として、釜石市の経済活性化をめざす動きを追っている。

経済活性化につながる釜石市の動きとして注目すべき点は、新日鐵釜石製鐵所の高炉停止後も製造業の雇用規模が、それほど落ち込まなかったことである。釜石市の製造業従業者数は、2000年（4801人）まで、高炉停止前年の1988年（4621人）の水準を上回っていた。製造業の雇用が維持された最大の要因は、釜石市や新日鐵が積極的に企業誘致に取り組み、それがある程度成果をあげたことにある。大部分が中小企業である誘致企業が釜石

市およびその周辺地域に工場や事業所を新設したのは、3交替24時間勤務を抵抗なく受け入れる職場・地域・家庭の風土、365日24時間稼働が可能な釜石港の労働慣行など、釜石市固有のメリットが存在するからである。これらのメリットは、新日鐵釜石製鐵所が長年にわたって築き上げてきたものである。高炉停止後、新日鐵がもたらす直接の経済効果は縮小したが、それでも、新日鐵が蓄積してきた産業インフラは、いまだに健在なのである。

一方で、製造業の健闘だけでは、釜石市の経済活性化が実現しえないのもまた、冷厳な事実である。すでに別の機会（橘川武郎・連合総合生活開発研究所編『地域からの経済再生－産業集積・イノベーション・雇用創出－』有斐閣、2005年。平成17年度中小企業研究奨励賞準賞受賞）に指摘したように、最終的には雇用の創出につながらない限り、地域の経済再生は達成されないからである。

釜石市は相対的に製造業のウエートの大きい町であるが、それでも、同市の産業別従業者数に占める製造業の比率は25%にとどまる。これに対して、流通業やサービス業などの第3次産業の比率は約60%に達する（2004年現在）。釜石市における雇用創出にとっては、製造業の活性化とともに、第3次産業の活性化が、きわめて重要なファクターとなるのである。

地方における第3次産業の活性化に関しては、まちなか居住と中心商店街再生を結びつけたコンパクトシティの構想が、注目を集めている。この構想は、釜石市にとってもある程度有効であるが、そこには限界もある。なぜなら、コンパクトシティの形成には一定規模以上の人口や都市機能の集積が必要であり、それが本格的に成功をおさめるのは、県庁所在地クラス以上の都市であると見込まれるからである。コンパクトシティの全国的典型が青森市・福島市・長野市・富山市・神戸市であることは、この点を如実に示している。

釜石市のような人口5万人以下の小都市において第3次産業を活性化させるためには、外部の需要を呼び込んで来訪者数をふやすことが、不可欠の前提となる。そのためには、まず、地元固有の資源をフルに有効活用しなければならないが、幸い釜石市には、おいしくて豊富な水産物や全国有数の規模を誇るウインドファーム（集合型風力発電施設）、産業観光の対象となる鉄の歴史館・釜石鉱山・橋野高炉跡などが存在する。次に、地域ブランドを確立することが重要であるが、この点では、釜石ブランドを三陸海岸ブランドや銀河鉄道ブランド（花巻・遠野・釜石を結ぶJR釜石線は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のモデルとなった）という広域ブランドと結びつけることができれば、活路が開ける。

もちろん、釜石市の場合も、経済活性化への道筋は平坦なものではない。しかし、高炉が稼働していた時代に蓄積した産業インフラやユニークな観光資源などの固有のメリットを生かし、「銀河鉄道が三陸の海に出会う町・釜石」というブランドイメージを確立することができれば、経済活性化は現実のものとなる。二重の悲劇に遭遇した釜石市が活気づいて再生を実現するにいたれば、同じく苦境に立たされている全国の小都市にとっての「希望の灯」になることは、間違いない。我々は、釜石市で始まりつつある地方における希望への挑戦が、今後どのような展開をとげていくか、期待を込めて見守ることにしたい。